

【九州大学大学院芸術工学府 芸術工学専攻 コミュニケーションデザイン科学コース】  
(2021 年度以降入学者)

1) ディプロマ・ポリシー (学位授与方針)

教育の目的

<修士課程・博士後期課程>

コミュニケーションデザイン科学コースでは、芸術工学の視点から、芸術工学的感性を持ち、視聴覚情報を核とするコミュニケーションに関するツール・機器及びスキルを統合し、通信の最終的な目的である「トータル・コミュニケーション」の質を高め、人間生活の向上に資するための教育・研究を行うことを目的としている。

そのために、視聴覚情報の源としての言語、音声、画像情報に関する教育、情報を伝えるための場に関する教育、音声や画像の情報を処理するための教育、劇場・音楽堂等に係る芸術、工学等の知識を基盤としたマネジメントなどに関する実践的な教育を行う。

- ・修士課程では、学士レベルの学習や学問的経験を基礎に視聴覚コミュニケーションのコンテンツを理解し、メディア及び場すなわちコミュニケーション環境の特性を熟知した視聴覚情報のトータル・コミュニケーションのデザインを担える人材を育成する。
- ・博士後期課程では、修士レベルの学習や学問的経験を基礎に視聴覚情報のトータル・コミュニケーションおよび専門的・学術的な基礎や実践力を高度に発展させながら、世界レベルで高い影響力をもつ独創的な研究成果を生み出し、指導的な立場で力強く発信できるような専門家としての能力を育成する。

授与する学位

本コースの教育目的、学修目標を達成し、課程修了要件を満たした者に、修士 (芸術工学)、博士 (芸術工学)、博士 (工学) の学位を授与する。

参照基準

<修士課程・博士後期課程>

- (1) Subject Benchmark Statement - Music

<http://www.qaa.ac.uk/docs/qaa/subject-benchmark-statements/sbs-music-16.pdf>

- (2) Subject Benchmark Statement - Engineering

<https://www.qaa.ac.uk/docs/qaa/subject-benchmark-statements/sbs-engineering-15.pdf>

- (3) Subject Benchmark Statement -Art and Design

<https://www.qaa.ac.uk/docs/qaa/subject-benchmark-statements/sbs-art-and-design-17.pdf>

到達目標

<修士課程>

A. 知識・理解

- A-1. 言語、音楽情報、環境音、視覚情報、視聴覚文化などの分野について体系的に理解し、特定の分野に焦点を当てて、その専門的内容を的確に説明できる。
- A-2. 音情報源の機能や特性を体系的に学び、情報伝達を物理的に解析・制御し、人間にとって最適な音響情報伝達を実現するための専門的技術についての的確に説明できる。
- A-3. 画像をはじめ視覚情報や視覚メディアに対する様々な処理や知的利用に関して体系的に理解し、特定の課題に焦点を当てた研究の知識を有して、わかりやすく説明できる。

A-4. 劇場・音楽堂等に関わる芸術、マネジメント、工学等の分野の内容について理解し、その専門的内容や関連性を的確に説明できる。

#### B. 技能

B-1. 視聴覚情報を融合する手段や方策などを研究活動に活用できる。

B-2. 音響情報を効果的に伝達し、活用する手段や方策などを研究活動に活用できる。

B-3. 専門分野の十分な理解と統合的把握能力を得ると共に、数理的な解析とコンピュータによる数値計算の能力を有し、画像情報伝達に関する諸問題の研究に活用できる。

B-4. 芸術、マネジメント、工学等の分野の内容を融合する手段や有機的な連携方策などを研究活動に活用できる。

#### C. 実践

C-1. コミュニケーション・スキルと自己表現能力を鍛え、他の領域と積極的に交流できる視点を養う。

C-2. より幅広い科学的手法と論理的思考力および実践能力を身につけると共に、科学・技術と人間・社会とのかかわりの問題を理解し考慮することができる。

C-3. 視聴覚文化、視聴覚コミュニケーションのあり方についての課題解決に積極的に挑戦することができる。

C-4. 音を用いた各種情報伝達についての課題解決に積極的に挑戦することができる。

C-5. 画像情報分野における問題を自律的に見出し解決しようとする積極性を持つ。その過程では、社会を視野に入れた多様な視点及び他者との協働を重視する柔軟性を備える。

C-6. 劇場・音楽堂等における芸術・工学等の知識に基づいた新しいマネジメントについての課題解決に積極的に挑戦することができる。

### <博士後期課程>

#### A. 知識・理解

A-1. 言語、音楽情報、環境音、視覚情報、視聴覚文化、文化政策、アートマネジメントなどの分野について体系的に理解し、特定の分野に焦点を当てて、その高度な専門的内容を的確に説明できる。

A-2. 音情報源の機能や特性を体系的に学び、情報伝達のを物理的に解析・制御し、人間にとって最適な音響情報伝達を実現するための専門的技術について高度かつ的確に説明できる。

A-3. 画像をはじめ視覚情報や視覚メディアに対する様々な処理や知的利用に関して体系的に理解し、特定の課題に焦点を当てた高度な研究の知識を有して、わかりやすく説明できる。

#### B. 技能

B-1. 視聴覚情報を融合する手段や方策などを高度な研究活動に活用できる。

B-2. 音響情報を効果的に伝達し、活用する手段や方策などを高度な研究活動に活用できる。

B-3. 専門分野の十分な理解と統合的把握能力を得ると共に、数理的な解析とコンピュータによる数値計算の能力を有し、画像情報伝達に関する諸問題の高度な研究に活用できる。

#### C. 実践

C-1. コミュニケーション・スキルと自己表現能力を鍛え、他の領域と積極的に交流できる高度な視点を養う。

C-2. より幅広い科学的手法と論理的思考力および実践能力を身につけると共に、科学・技術と人間・社会とのかかわりの問題を高度に理解し考慮することができる。

C-3. 視聴覚文化、視聴覚コミュニケーションのあり方についての高度に課題解決に積極的に挑戦することができる。

C-4. 音を用いた各種情報伝達についての高度な課題解決に積極的に挑戦することができる。

C-5. 画像情報分野における高度な問題を自立的に見出し解決しようとする積極性を持つ。その過程では、社会を視野に入れた多様な視点及び他者との協働を重視する柔軟性を備える。

## 2) カリキュラム・ポリシー（教育課程編成方針）

ディプロマ・ポリシーを達成するために、別表（カリキュラム・マップ）の通り、教育課程を編成する。

### 【コースワーク】

#### <修士課程>

学生各自の所属講座（専攻する学問領域）で開設される授業科目を6単位以上選択履修する。さらに、所属コースにおいて所属講座以外の講座で開設される授業科目から4単位以上を他講座科目として選択履修することで、分野を横断する学際性を身につける。学部で学んだ専門領域が異なる学生に対しては、本コースの基礎となる内容を理解させる目的で、「視聴覚情報融合特論演習」、「音響情報伝達特論演習」、「画像情報伝達特論演習」を開設している。

自由科目として芸術工学専攻修士課程の授業科目（各コースの特別演習Ⅰ及びⅡを除く。）から選択履修する。ただし、研究指導教員が必要と認める場合には、芸術工学府他専攻、他学府及び芸術工学部の授業科目から4単位まで選択履修することができる。

以上の知識基盤を土台に、必修のコース内共通科目「コミュニケーションデザイン科学特別演習Ⅰ及びⅡ」（各4単位）を履修する。これらの科目は主として研究指導を目的としたものである。また、各講座の専門科目にはPBL（Problem Based Learning）が設定されている。いわゆる課題解決型の演習科目であり、大きな課題の中で受講学生自らが実行すべき具体的課題を設定、適宜教員の指導を受けながら遂行し、最終的には構成員へ成果をプレゼンテーションするという形式の演習科目である。さらに実社会における知識・技術に触れながら、学習内容を定着・深化させるとともに、学習・研究への動機付けを強め、さらに自己職業適性や将来計画といったキャリア・デザインについて考えるためにインターンシップを設定する。これらの内、2科目を選択必修とする。

#### <博士後期課程>

博士課程では、自立した研究者としてアカデミアや社会で活躍できるための高度な研究能力を養成する。そのため、学生が指導を受ける教員等により、研究指導を主な目的とする当該科目を6単位以上選択履修する。

また、芸術工学専攻の修士課程及び博士後期課程の共通科目として設定されている授業科目（各コースの特別演習Ⅰ及びⅡを除く科目）から、4単位以上を修得する。

### 【研究指導体制】

#### <修士課程・博士後期課程>

- ① 入学時に学生毎に指導教員を定め、必要であれば関連分野から副指導教員を定める。
- ② 学位論文の研究テーマは、入学前に確認したことを中心に、指導教員及び副指導教員の指導のもとに決定する。
- ③ 指導教員及び副指導教員は、研究テーマが一連の研究手順に沿って進行していくように指導し、論文作成を指導する。
- ④ 指導教員及び副指導教員は、その学生の理解度、進行度等を学期ごとに評価しながら指導するものとする。1年次終了時点（博士後期課程は1年次及び2年次終了時点）で、研究の進捗状況についての中間報告を義務付ける。

## 【学位論文審査体制】

### <修士課程>

学位論文審査基準として5つの評価項目（1. 研究テーマの位置づけと意義、2. 研究方法の妥当性、3. 論証及び結論の妥当性と意義、4. 倫理性と形式性、5. 研究能力）を設け、修士論文審査の際に、審査委員がそのそれぞれにつき評価を加え、その評価を基礎に修士論文の得点及び合否を決定する。

### <博士後期課程>

学位論文審査基準として5つの評価項目（1. 研究テーマの位置づけと意義、2. 研究方法の妥当性、3. 論証及び結論の妥当性と意義、4. 倫理性と形式性、5. 研究能力）を設け、博士論文審査の際に、審査委員がそのそれぞれにつき評価を加え、その評価を基に最終試験の合否を判定する。

## 【継続的なカリキュラム見直しの仕組み（内部質保証）】

### <修士課程>

カリキュラムは、二つの分節に区分して運用する。第1分節（1年～2年前半）は、基盤的な学びの姿勢と知識・理解を習得し、発展的な知識・理解およびその活用力を習得する「導入・基礎」期、第2分節（2年後半）は知識・能力の統合と新しい知識の創出に取り組む「統合」期と位置づける。

当該分節の中で焦点化した学修目標の達成度は、それぞれの分節の終盤に、以下の方針（アセスメント・プラン）に基づいて評価し、その評価結果に基づいて、授業科目内の教授方法や授業科目の配置等の改善の必要がないかを学務専門委員会の下に設置するカリキュラム検討WGにおいて検討することで、教学マネジメントを推進する。

#### 《アセスメント・プラン》

- ・「導入・基礎」期の評価：研究計画に基づき着実に研究が進行しているかどうかを修士研究中間発表会にて確認する。
- ・「統合」期の評価：修士論文審査と修士研究発表会にて確認する。

### <博士後期課程>

#### 《アセスメント・プラン》

指導教員及び副指導教員は、その学生の理解度、進行度等を学期ごとに評価する。1年次及び2年次終了時点で義務付けている研究の進捗状況についての中間報告に基づいて評価し、3年次終了時点での博士論文公聴会において最終評価を行う。

## 3) アドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）

### 求める学生像

#### <修士課程>

コミュニケーションデザイン科学コース修士課程では、以下の学生を求めている。

- a) コミュニケーションデザイン科学コースの教育を受けるために十分な基礎学力を持っていること。
- b) コミュニケーションデザイン科学コースを目指す明確な意思を持っていること。
- c) 主体的で勉学意欲が旺盛であり、各種課題に対して真摯に取り組めること。
- d) コミュニケーションデザイン科学を基礎とした高度職業人・研究者・教育者を目指していること。

なお本コースは九州大学芸術工学部の学士課程プログラムを基盤として展開するものであることから、同課程の学修目標を達成している、もしくは同等以上の知識・能力を習得しているとみなされている事を、入学の要件とする。

### <博士後期課程>

コミュニケーションデザイン科学コース博士後期課程では、修士課程に求められる学生像に加え、以下の学生を求めている。

- e) 視聴覚情報のトータル・コミュニケーションおよび専門的・学術的な基礎や実践力、芸術文化に関する専門的・学術的な基礎や実践力を高度に発展させながら、世界レベルで高い影響力をもつ独創的な研究成果を生み出し、指導的な立場で力強く発信できるような専門家を目指していること。

なお本コースは九州大学大学院芸術工学府コミュニケーションデザイン科学コースの修士課程プログラムを基盤として展開するものであることから、同課程の到達目標を達成している、もしくは同等以上の知識・能力を習得しているとみなされている事を、入学の要件とする。

### 入学者選抜方法との関係

#### <修士課程>

- ・一般選抜、外国人留学生特別選抜、社会人特別選抜を実施する。
- ・一般選抜および外国人留学生特別選抜では、成績証明書や研究計画書等の提出書類に加え、外国語試験、専門試験、面接試験を課す。(a)にかかわる資質や態度を見るため、専門試験に加え外国語試験を、(b) (c) (d)にかかわる資質や態度を見るため、面接試験を実施する。
- ・社会人特別選抜では、業績報告書や研究計画書、TOEFL-iBT 又は TOEIC L&R の公開テストの成績証明書等の提出書類に加え、面接試験を実施し、アドミッション・ポリシーに合致する意欲的な社会人を積極的に受け入れる。

#### <博士後期課程>

博士後期課程の選抜（一般選抜、社会人特別選抜）にあたっては、修士論文、研究計画書などの提出書類、それに基づく面接試験によって、上記(a)～(d)の資質・態度を身につけているかどうかを検討し、可否の判定を行う。

	①知識・技能	②思考力・判断力・表現力等の能力	③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度
修士課程・一般選抜	外国語試験、専門試験、成績証明書	面接試験	研究計画書
修士課程・外国人留学生特別選抜	外国語試験、専門試験、成績証明書	面接試験	研究計画書
修士課程・社会人特別選抜	成績証明書、TOEFL-iBT 又は TOEIC L&R の公開テストの成績証明書	面接試験	研究計画書
博士後期課程・一般選抜	成績証明書、修士論文	面接試験	研究計画書
博士後期課程・社会人特別選抜	成績証明書、修士論文	面接試験	研究計画書

芸術工学府芸術工学専攻 コミュニケーションデザイン科学コース カリキュラムマップ

科目区分	コース内共通科目	視聴覚情報融合 講座科目	音響情報伝達講 座科目	画像情報伝達講 座科目	ホールマネジメ ントエンジニア リング講座科目	研究指導
(再掲は薄色表示)	コース内共通科目	視聴覚情報融合 講座科目	音響情報伝達講 座科目	画像情報伝達講 座科目	ホールマネジメ ントエンジニア リング講座科目	研究指導

区分	領域	学修目標	修士課程	博士課程	1年		2年		D1-3			
					前期	後期	前期	後期	前期	後期		
C. 実践	コース内共通科目	C-6.劇場・音楽堂等における芸術・工学等の知識に基づいた新しいマネジメントについての課題解決に積極的に挑戦することができる。			ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅠ(2)	ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅡ(2)	ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅢ(2)	ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅣ(2)				
		C-5.画像情報分野における問題を自律的に見出し解決しようとする積極性を持つ。その過程では、社会を視野に入れた多様な視点及び他者との協働を重視する柔軟性を備える。	C-5.画像情報分野における高度な問題を自律的に見出し解決しようとする積極性を持つ。その過程では、社会を視野に入れた多様な視点及び他者との協働を重視する柔軟性を備える。	視聴覚情報融合特論・演習(2)	視聴覚情報融合PBL(2)	視聴覚情報融合特論・演習(2)	視聴覚情報融合PBL(2)	視聴覚情報融合PBL(2)	視聴覚情報融合PBL(2)	コミュニケーションデザイン科学プロジェクト研究Ⅰ	コミュニケーションデザイン科学プロジェクト研究Ⅰ	
		C-4.音を用いた各種情報伝達についての課題解決に積極的に挑戦することができる。	C-4.音を用いた各種情報伝達についての高度な課題解決に積極的に挑戦することができる。	音響情報伝達特論・演習(2)	音響情報伝達PBL(2)	音響情報伝達特論・演習(2)	音響情報伝達PBL(2)	音響情報伝達PBL(2)	音響情報伝達PBL(2)	コミュニケーションデザイン科学プロジェクト研究Ⅱ	コミュニケーションデザイン科学プロジェクト研究Ⅱ	
		C-3.視聴覚文化、視聴覚コミュニケーションのあり方についての課題解決に積極的に挑戦することができる。	C-3.視聴覚文化、視聴覚コミュニケーションのあり方についての高度な課題解決に積極的に挑戦することができる。	画像情報伝達特論・演習(2)	画像情報伝達PBL(2)	画像情報伝達特論・演習(2)	画像情報伝達PBL(2)	画像情報伝達PBL(2)	画像情報伝達PBL(2)	コミュニケーションデザイン科学プロジェクト研究Ⅲ	コミュニケーションデザイン科学プロジェクト研究Ⅲ	
		C-2.より幅広い科学的手法と論理的思考力および実践能力を身につけると共に、科学・技術と人間・社会とのかかわりの問題を理解し考慮することができる。	C-2.より幅広い科学的手法と論理的思考力および実践能力を身につけると共に、科学・技術と人間・社会とのかかわりの問題を高度に理解し考慮することができる。	芸術工学特別研修 1-20	芸術工学特別研修 1-20	芸術工学特別研修 1-20	芸術工学特別研修 1-20	芸術工学特別研修 1-20	芸術工学特別研修 1-20	コミュニケーションデザイン科学特別演習Ⅰ(4)	コミュニケーションデザイン科学特別演習Ⅰ(4)	
		C-1.コミュニケーション・スキルと自己表現能力を鍛え、他の領域と積極的に交流できる視点を養う。	C-1.コミュニケーション・スキルと自己表現能力を鍛え、他の領域と積極的に交流できる高度な視点を養う。	視聴覚情報融合特論・演習(2)	視聴覚情報融合PBL(2)	視聴覚情報融合特論・演習(2)	視聴覚情報融合PBL(2)	視聴覚情報融合PBL(2)	視聴覚情報融合PBL(2)	コミュニケーションデザイン科学特別演習Ⅱ(4)	コミュニケーションデザイン科学特別演習Ⅱ(4)	
B. 通用・分析	ホールマネジメントエンジニアリング	B-4.芸術、マネジメント、工学等の分野の内容を融合する手段や有機的な連携方法などを研究活動に活用できる。			ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅠ(2)	ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅡ(2)	ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅢ(2)	ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクトⅣ(2)				
					ホール工学技術演習(2)							
	画像情報伝達	B-3.専門分野の十分な理解と統合的把握能力を得ると共に、数値的な解析とコンピュータによる数値計算の能力を有し、画像情報伝達に関する諸問題の研究に活用できる。	B-3.専門分野の十分な理解と統合的把握能力を得ると共に、数値的な解析とコンピュータによる数値計算の能力を有し、画像情報伝達に関する諸問題の高度な研究に活用できる。	視覚環境理解システム設計特論(2)	視覚環境理解システム設計特論(2)	視覚環境理解システム設計特論(2)	視覚環境理解システム設計特論(2)	視覚環境理解システム設計特論(2)	視覚環境理解システム設計特論(2)	視覚環境理解システム設計特論(2)	視覚環境理解システム設計特論(2)	
				視覚メディア設計特論(2)	視覚環境知能設計特論(2)	視覚メディア設計特論(2)	視覚環境知能設計特論(2)	視覚メディア設計特論(2)	視覚環境知能設計特論(2)	視覚メディア設計特論(2)	視覚環境知能設計特論(2)	
	音響情報伝達	B-2.音響情報を効果的に伝達し、活用する手段や方策などを研究活動に活用できる。	B-2.音響情報を効果的に伝達し、活用する手段や方策などを高度な研究活動に活用できる。	音響環境制御特論(2)	聴覚生理学特論	音響環境制御特論(2)	聴覚生理学特論	音響環境制御特論(2)	聴覚生理学特論	音響環境制御特論(2)	聴覚生理学特論	
				音響信号処理特論(2)	統計工学特論(2)	音響信号処理特論(2)	統計工学特論(2)	音響信号処理特論(2)	統計工学特論(2)	音響信号処理特論(2)	統計工学特論(2)	
	視聴覚情報融合	B-1.視聴覚情報を融合する手段や方策などを研究活動に活用できる。	B-1.視聴覚情報を融合する手段や方策などを高度な研究活動に活用できる。	多次元システム解析・構成特論(2)	音響環境評価特論(2)	多次元システム解析・構成特論(2)	音響環境評価特論(2)	多次元システム解析・構成特論(2)	音響環境評価特論(2)	多次元システム解析・構成特論(2)	音響環境評価特論(2)	
				情報統計学特論(1)	視覚記号特論(2)	情報統計学特論(1)	視覚記号特論(2)	情報統計学特論(1)	視覚記号特論(2)	情報統計学特論(1)	視覚記号特論(2)	
	A. 知識・理解	ホールマネジメントエンジニアリング	A-4.劇場・音楽堂等に関わる芸術、マネジメント、工学等の分野の内容について理解し、その専門的内容や関連性を的確に説明できる。			文化政策特論(2)	アートマネジメント特論(2)	文化政策特論(2)	アートマネジメント特論(2)			
						ホール工学技術特論(2)						
		画像情報伝達	A-3.画像をはじめ視覚情報や視覚メディアに対する様々な処理や知的利用に関して体系的に理解し、特定の課題に焦点を当てた研究の知識を有して、わかりやすく説明できる。	A-3.画像をはじめ視覚情報や視覚メディアに対する様々な処理や知的利用に関して体系的に理解し、特定の課題に焦点を当てた高度な研究の知識を有して、わかりやすく説明できる。	視覚環境理解システム設計特論(2)	画像情報伝達システム設計特論(2)	視覚環境理解システム設計特論(2)	画像情報伝達システム設計特論(2)	視覚環境知能設計特論(2)	視覚メディア設計特論(2)	視覚環境知能設計特論(2)	視覚メディア設計特論(2)
					視覚メディア設計特論(2)	視覚環境知能設計特論(2)	視覚メディア設計特論(2)	視覚環境知能設計特論(2)	視覚メディア設計特論(2)	視覚環境知能設計特論(2)	視覚メディア設計特論(2)	視覚環境知能設計特論(2)
音響情報伝達		A-2.音響情報の機能や特性を体系的に学び、情報伝達の場を物理的に解析・制御し、人間にとって最適な音響情報伝達を実現するための専門的技術について的確に説明できる。	A-2.音響情報の機能や特性を体系的に学び、情報伝達の場を物理的に解析・制御し、人間にとって最適な音響情報伝達を実現するための専門的技術について高度かつ的確に説明できる。	音響環境制御特論(2)	聴覚生理学特論	音響環境制御特論(2)	聴覚生理学特論	音響環境制御特論(2)	聴覚生理学特論	音響環境制御特論(2)	聴覚生理学特論	
				音響信号処理特論(2)	統計工学特論(2)	音響信号処理特論(2)	統計工学特論(2)	音響信号処理特論(2)	統計工学特論(2)	音響信号処理特論(2)	統計工学特論(2)	
視聴覚情報融合	A-1.言語、音楽情報、環境音、視覚情報、視聴覚文化などの分野について体系的に理解し、特定の分野に焦点を当てて、その専門的内容を的確に説明できる。	A-1.言語、音楽情報、環境音、視覚情報、視聴覚文化などの分野について体系的に理解し、特定の分野に焦点を当てて、その高度な専門的内容を的確に説明できる。	多次元システム解析・構成特論(2)	音響環境評価特論(2)	多次元システム解析・構成特論(2)	音響環境評価特論(2)	多次元システム解析・構成特論(2)	音響環境評価特論(2)	多次元システム解析・構成特論(2)	音響環境評価特論(2)		
			情報統計学特論(1)	視覚記号特論(2)	情報統計学特論(1)	視覚記号特論(2)	情報統計学特論(1)	視覚記号特論(2)	情報統計学特論(1)	視覚記号特論(2)		
区分	講義	学修目標	修士課程	博士課程	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
学修目標					1年		2年		D1-3			
アセスメント・プラン					修士研究中間発表会における評価				修士論文審査と修士研究発表会における評価		研究進捗状況中間報告と修士論文公聴会における評価	